中国・少数民族伝統体育運動会にみるアイデンティティの諸相

渡邊 昌史

Aspects of identity seen at national meets involving traditional athletic sports among ethnic minorities in China

Masashi Watanabe

Abstract

The People's Republic of China, which is a multiethnic country, considers policies focusing on ethnic minorities to be an important national issue. The present study was designed to examine the identity of ethnic minorities by focusing on national meets involving traditional athletic sports among such ethnic minorities as one aspect of national policy. The 1st and 7th National Meets of Athletic Sports for Ethnic Minorities were held respectively in 1953 and in 2003, during which a change from modern sports to ethnic sports was recognized with respect to the sporting events emphasized. Subsequently, a change from those ethnic sports to post-ethnic sports was recognized. The participation of members of minority groups in these National Meets appeals to their ethnic identity, leading to the creation of a pan-ethnic minority identity. Since in addition to ethnic minorities, the Han race also participates in the National Meets, the Meets function as a cultural mechanism by which the Pan-ethnic minority identity is replaced by the Chinese ethnic identity, thus equating the Chinese ethnic identity with the official national identity. The representation of culture at the National Meets has been changing from a state in which "ethnic minorities represent different cultures" to one in which "ethnic minorities represent their own cultures." These facts suggest that ethnic sports in China contribute to political and ethnic integration, whereby ethnic sports are useful for affirming ethnic identities that are manifested at various intensity levels, and that ethnic sports serve as a medium whereby changes in identity can take place.

Key words : ethnic sport, cultural change, post-ethnic sport**(Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 51: 287-298, May, 2006)**

キーワード：民族スポーツ，文化変化，ポスト
民族スポーツ

I 問題の所在

多民族国家の中華人民共和国（以下，「中国」）

天理大学体育学部（非常勤）
〒632-0071 奈良県天理市田井之庄町 80
連絡先 渡邊昌史

Tenri University, Faculty of Health, Budo & Sports
Studies
80 Tainosho-cho, Tenri, Nara 632-0071

という)は現在、総人口の約92パーセントを占める漢族と、残りの約8パーセント(約9,056万人)の少数民族から成っている^{注1)}。中国は「民族平等、民族団結」を憲法で明文化し国是の一つとしており、少数民族政策を重要な国家課題と位置付けてきた。

本研究は中国の少数民族政策をめぐる少数民族のアイデンティティの問題を、具体的には「全国少数民族伝統体育運動会」(以下、「少数民族運動会」とする)という場に注目して、その歴史と変化から論じようとするものである。

少数民族運動会は主として少数民族が民族スポーツを競い、また「民族文化」をモチーフにした歌舞を披露し合う全国的スポーツ・イベントであり、1953年を嚆矢として2003年の大会が第7回目に数えられている。

少数民族運動会にかかわる先行研究としてまずあげなければならないのは、邱(1995)、李(1999)によるものであり、いずれの論文も国家政策としての少数民族政策及び少数民族運動会にみる変化を「発展」として捉えている。そうした進化論的枠組みに基づく研究では、少数民族の文化は漢族の文化に対し時間的差異をもつ存在として位置付けられてきた。

これに対し本研究は文化を時間軸ではなく空間軸でとらえることにより、少数民族運動会によって醸成される少数民族のアイデンティティの問題について明らかにしようとする視座に立っている。また、併せて国民国家の「人民^{注2)}」形成という政治的動態のなかで、文化を表象することと民族スポーツがどのような関係を取り結ぶのかについても論じようとするものである。

なお、本研究で用いた資料は論文末尾に挙げた諸文献及びウェブサイトと、筆者が1999年8月と9月におこなった第6回少数民族運動会の現地調査で得られた情報から成っている。

II 中国における「少数民族」と少数民族スポーツ政策

1. 少数民族の概念と民族政策

複雑な民族構成をもつ中国史上において、1920

年代以前は漢族以外の民族集団を一まとめにした少数民族というカテゴリーは存在しなかった(岡本, 1999, p. 34)。

1949年、中国共産党によって建国された中華人民共和国の民族問題にかかわる基本目標は国家の領域的統合、辺境の対外安全保障、忠誠心をもつ、均質な「人民」の形成であり、政策原則は民族間の政治的・経済的平等であった(毛里, 1998, pp. 45-47)。建国によって中央政府の統治下に編入した漢族以外の諸民族(以下、「エスニック・グループ」という)を「人民」として統合して行くためには、その構成員をはっきりと確定し、境界をつけた国家的・政治的領域にアイデンティティと帰属意識を抱かせる必要があった。それには民族の識別と認知(いわゆる「民族識別工作」)が重要な役割を果たした。

建国当時、民族として認知されていたのは「五族^{注3)}」(漢族、満洲族、モンゴル族、回族、チベット族)の他にウイグル族、ミャオ族、ヤオ族、イ族、朝鮮族を加えた10族に過ぎなかった。ところが、中央政府が1953年に初めて実施した人口センサスでは、自己申告に基づいて登録された「民族名」が400以上にものぼった。そこで中央政府は民族識別工作により分別、統合をおこなった結果^{注4)}、1979年までに55の少数民族が認定された^{注5)}。これにより、エスニック・グループは中国における「少数民族」という新たなステータスを付与されたこととなった。

文化大革命期、中央政府は民族問題の存在を認めず、民族工作自体が取り消された。

1980年代に至って、リベラルな民族政策が押し進められるようになり、そこでは、少数民族自身からの要求も受け入れ、1981年から1985年まで民族籍の回復や変更を積極的に推し進めた。だが、予想外にもおびただしい数の人々が少数民族籍の回復や変更を求め、少数民族が急増する結果をもたらした。その数は1986年までに260万人に達した^{注6)}。

ここで注目すべきは、はじめから「55の少数民族」であったのではなく、エスニック・グループを中央政府が識別するという政治的行為によ

り、今日においては中央政府公認の少数民族が55種類あるとされていることであり、これは中国における「民族」、「少数民族」とは政治的かつ状況的に形成された概念であることを教える。

2. 少数民族スポーツ政策と全国少数民族運動会

民族スポーツが中央政府の少数民族政策のなかに組み入れられた契機は1949年10月、全国体育工作会議にて『「広範囲に民間スポーツ形式を発展させる」という民族スポーツ推進策を採決した」(李, 1998, p. 51) ことである。「伝統に対するこのような視点は、国家のアイデンティティを伝統文化に求める点で、ひとつの国家として文化的に統合しようという試みと考えることができる^{注7)}」(宮永, 2000, pp. 50-51)。

先述のように中央政府のねらいは、エスニック・グループにも「人民」という帰属意識をもたせる「上からの国民形成」(毛里, 1998, p. 74)にあった。それには前段階として「少数民族」という国家的ステータスを与え、彼らに自己認識させることが何よりも必要であった。そのために中央政府は「少数民族の文化」を認定し、自己認識化させるためにとられたのが少数民族に対する民族スポーツ政策(以下、少数民族スポーツ政策という)であった。

換言すれば、中央政府の少数民族スポーツ政策によって、エスニック・グループは民族スポーツという文化を媒介として「少数民族」に、そして「人民」となることが政治的に要請されたといえよう。

少数民族の民族スポーツは国家的スポーツ・イベントとしては、まず初めに国際スポーツの競技会の場において、その存在が公にされた。

1953年11月、「全国民族形式体育表演及竞赛大会」が天津市にて開催され、華北区、東北区、西北区、中南区、西南区(含西藏)、内蒙古自治区、人民解放軍、鉄道系統の9単位から、12の少数民族(当時)及び漢族の選手395名が参加し、ウエイト・リフティング、ボクシング、レスリング、フェンシング、ライフル射撃の国際スポーツ5競

技の他に、武術、民間体育、馬術など383種類の民族スポーツが紹介された(中国体育博物館・国家体委文史工作委員会, 1990, pp. 782-783)。

1959年9月には、1910年から1948年まで「全国運動会」として7回開催されていた全国的総合運動会が「中華人民共和国全国運動会」へと発展的解消をみた。そこでは国際スポーツが主ではあったが、武術、中国将棋など幾つかの民族スポーツも実施された。

だが、1956年11月から起こった文化大革命により民族工作自体が消滅したこの一時期、少数民族の民族スポーツのみならず、中国スポーツ界もまた1970年頃まで休止状態に陥った。

「少数民族のスポーツの広範囲な実践と急速な発展、そして国内諸民族からの要求を考慮した結果」(邱, 1995, p. 207)、1981年9月、国家民族事務委員会と国家体育運動委員会(現在の国家体育総局)は少数民族の民族スポーツに関する合同会議を開催した。そして、少数民族の民族スポーツを「積極的に提唱し、指導を強化し、改革し、着実な足取りで発展させる」方針を打ち出し、少数民族の民族スポーツの祭典を将来において再び開催することを決議した(邱, 1995, p. 207)。これを受けて、民族スポーツの地方別大会や競技会が開催されるなど、民族スポーツの全国組織化がなされていった。

1982年9月には内蒙古自治区フフホト市で55の少数民族と漢族から成る29代表団が参加し、「全国少数民族伝統体育運動会」が開催された。「少数民族運動会」の名称で開催された初めての大会である。この大会より参加方式は各省、自治区、直轄市単位となり、それぞれ複数の少数民族によって構成された。比賽と表演の区分^{注8)}を設け、比賽は中国式摔跤と射箭、表演では68の民族スポーツが実施された(中国体育博物館・国家体委文史工作委員会, 1990, pp. 783-785)。選手団総勢863名のうち少数民族の選手は593名を占めるが、残り270名のうちに少数民族の役員を認めたとしても、少なからず漢族が参加しているのは特筆に値する。「この祭典を訪れた報道関係者たちは、50を超える少数民族が兄弟のように集

うことができるのは世界中だけでも中国だけ」(邱, 1995, p. 208) と称えたという。

1984年、国家民族事務委員会と国家体育運動委員会は、1953年の大会を漢族と少数民族が平等に関わった歴史的なイベントであり、少数民族の民族スポーツの歴史に新たな段階を切り開いたものと再評価し、さかのぼって「第1回全国少数民族伝統体育運動会」と認定するとともに、今後は4年ごとの定期開催を決定した^{注9)}(李, 1999, p. 51)。

定期開催となった第3回大会は1986年8月に新疆ウイグル自治区ウルムチ市で、55の少数民族と漢族による29代表団の総勢1,097名(うち、少数民族からは選手777名)が参加して、射箭、摔跤、馬術、刁羊、射弩、搶花炮、秋千の7競技及び115の表演が実施された(中国体育博物館・国家体委文史工作委員会, 1990, pp. 785-787)。

1991年11月には第4回大会が広西チワン族自治区南寧市で開催され、比賽は龍舟競渡、搶花炮、秋千、射弩、珍珠球、木球、摔跤、武術の8競技及び120の表演が実施された^{注10)}。初めて台湾の高山族^{注11)}からも龍舟競渡チームと歌舞団を迎え、「台湾海峡の両側の少数民族の団結が実現」(邱, 1995, p. 210)、30代表団と視察団、内外の記者を含め関係者は3,000名を超えた(第6回全国少数民族伝統体育運動会拉薩分賽場專刊編集部, 1999, p. 16)。なお、この大会は当初計画では前年の1990年に開催予定であったが、「1991年9月の第11回アジア大会北京開催のため」との理由をもって延期された経緯がある。これは1989年6月に起きた天安門事件が大きく影響していると考えられる。

1995年11月には第5回大会が雲南省昆明市にて、比賽は前回から実施の龍舟競渡、搶花炮、秋千、射弩、珍珠球、木球、摔跤、武術のほか、新たに毬球、打陀螺を加えた10競技及び129の表演が実施され、9,000名の関係者が集った(第6回全国少数民族伝統体育運動会拉薩分賽場專刊編集部, 1999, p. 16)。4年後のマカオ返還を控えてマカオからも視察団を迎え、中国人民解放軍と新疆生産建設兵団が初参加した。

1999年には第6回大会が国家民族事務委員会と国家体育総局の共催により、ラサ市と北京市に分けて、のべ13日間にわたって開催された。大会精神に「平等、団結、進歩、繁栄」を掲げ、目的に「民族体育の発展、民族体質の増強、民族の団結強化、民族精神の高揚」を高らかに謳い上げ、国内外に「一つの中国」をアピールするものであった。

ラサ大会は8月18日午前、ラサ市人民体育場で開幕式及び、7,000名のチベット族による祭典が執りおこなわれ、中国国営通信・新華社は「ラサの1300年の歴史で最も盛大な日」と報じた(朝日新聞電子版, 1999.8.18)。そして23日までの5日間、比賽は馬術、打陀螺、射弩、押加の4競技と表演が実施され約1,200名の選手が参加した。このうち押加はチベット族、打陀螺はチベット族及びワ族、ヤオ族、チワン族などの西南少数民族で主に実修されている民族スポーツであり、本大会のチベット開催に合わせて比賽に正式採用されたものであった。

北京大会は、ラサ大会から1ヵ月後の9月24日から30日まで開催された。9月24日夜、北京工人体育場にて開幕祭典が繰り広げられ、「錦繡中華」が警察、高校、職域、中央民族大学、地方芸術団などからの約6,400名によって盛大に演じられた。そして、朱鎔基中国共産党中央政治局常務委員・國務院総理(当時)が開会宣言を告げた。この開幕式は「工人体育場にておこなわれたスポーツ・イベントのなかでも最大規模」(中華人民共和國第六屆少数民族伝統体育運動会組織委員会, 1999a)とされる。34代表団から3,422名の選手が参加し、国家オリンピック体育センターを中心に比賽10競技及び100余りの表演が展開された^{注12)}。9月30日午後、警備によって封鎖された天安門広場に隣接する北京人民大会堂での閉幕式をもって全日程を終了した。

III 第6回少数民族運動会にみる 文化的動態と政治的動態

少数民族運動会及びそこで繰り広げられる民族スポーツには、それをおこなう人々の文化が色濃

く刻印されている。また、少数民族運動会は国家政策として開催されるものであり、そこには少数民族政策が直接的に反映している。よって、本章ではその変化を文化的動態と政治的動態という二つの作業概念に分けて論じることによって、少数民族運動会をめぐる彼らのアイデンティティが浮き彫りになってくると考える。

1. 文化的動態

はじめに大会名称の問題であるが、大会名を「少数民族運動会」としながらも、実際には少なからず漢族が参加している。これは「民族形式」として実施された1953年大会当初からのことであり、「少数民族」を冠し「少数民族運動会」と改称した1982年大会以降も引き続き漢族が参加している。この状況を指して大会広報では、1995年大会までは「55の少数民族」と少数民族のみを取りまとめて表記していたものを、1999年大会からは少数民族と漢族を一体化させた「56の民族」へと変更した。

アジア的な民族モデルは、何よりも共通の出生の絆や土着文化を強調し、民族は虚構の「超家族」、成員はみな兄弟姉妹とする（スミス、1998、pp. 27-128）。いわば土着主義的ナショナリズムともいえるこの認識は、大会歌「我愛中華」のなかに明確に読み取ることができる。少数民族と漢族を一つにまとめ「56の星座、56の花、56族は兄弟姉妹の一家」と謳い、「一つの中国」を強調しようとする意図が込められていることを教える。また、そこでは民衆の動員が精神とレトリックにおいて重要な役割を果たす（スミス、1998、p. 36）。少数民族運動会はまさに少数民族を動員する場であり、そこでのレトリックには近代オリンピックとの同型性、模倣性を指摘することができる。

マカルーン（1988、pp. 390-414）は近代オリンピックを、ゲーム、儀礼、祭典、スペクトルという4つのフレームによって多岐的に枠付けられた文化的パフォーマンスと定義する。少数民族運動会にみる文化的パフォーマンスの顕著な事例の一つが、今回から実施されたいわゆる「聖火リレー」である。この聖火採火のためにチベット族の

男女10名から成る登山隊が編成され、5月27日に8,848メートルのチョモランマ峰で太陽光線からの採火に成功し、ラサ大会開幕式へともたらされた（人民日報電子版、1999.2.8, 5.21, 5.28）。そして、辺境の民族自治区であるチベットと首都の北京を「民族の火」で結ぶべく空路にて運ばれ、市内の天壇公園に設けられた「中華民族の世紀宝鼎」に、9月9日9時9分9秒を期して少数民族と漢族を代表した9名によって点火すべく計画された（人民日報電子版、1999.8.25）。

ここでは、聖火リレーのなかでも特にそのプロセスが重視される。「中華民族聖火」は世界最高峰で採火され、それを周縁から中心へ求心的に、そして現代から歴代皇帝の権威へと遡及的に結びつけた。聖火リレーはそれをおこなうもののアイ

写真1 第6回大会のポスター

上部のマークは天壇とボタラ宮で燃え盛る聖火を図案化したもの。3つの炎は「団結、繁栄、進歩」を、その形は「6」をイメージする。下部は天壇とボタラ宮を組み合わせたもの。

デンティティを歴史的記憶の共有に求めるものであり、可視的である故にイメージ構築を容易にする。「9」という数字は「久」すなわち「永遠」に通じ、また、その火種をかつて皇帝が天意をはかった天壇の円丘上に移すという象徴的行為によって、中央政府の統治の正統性をスペクタクルに演出した。

大会のスペクタクル化の傾向は、周到な演出が施された開会式など随所に見ることができる。そして、国家的一大祝祭として新聞、テレビなどの既存のメディアはもとより、今回より開設されたウェブサイトにも媒介され、競技場に参集した少数民族と関係者にとどまらず、リアルタイムでグローバルに共有することを可能にさせた。

さらに、実施される民族スポーツそのものもさまざまな変化をみせた。その一例として搶花炮(qiang hua pao)を、具体的にはルール及び用具の変化を取り上げる。

搶花炮は2つのチームが1個の花炮をラグビーのように奪い合いゴールに持ち込めば得点となるゲームである。もともとは、チワン族とトン族が春節におこなう「花輪奪い」が起源であり、そこにはさまざまな儀礼的行為が付随していた(中国体育博物館, 1990, pp. 130-131)。すなわち、もともとの搶花炮は宗教的・祝祭的民族儀礼と相即不離の関係性を結ぶ「スポーツ文化複合」(寒川, 1991, pp. 139-145)として、実修する当該民族の文化システムに基づく、文化コードのなかで理解され、そのことによってはじめて意味を有するものであった。

今日、一般的におこなわれている搶花炮は儀礼的側面よりも主催者(政府)の管理する娯楽的活動としての側面が強くなっており、チワン族を越えた広西省全体の行事として民族的帰属を意識させるような文化政策の一環となっている(塚田, 2001, pp. 90-106)。

少数民族運動会では1986年大会から比賽に正式採用されているが、宗教的・祝祭的民族儀礼とは切り離され、勝敗を競うことに第一義的価値観が置かれた「競技スポーツ」となっている。1998年の規則改正を受けて、今大会から花炮とその発

射方法が改められた。

花炮はこれまで、直径5センチメートルの鉄環に赤い布を巻きつけたものを使用していたが、環のなかに指を差し込んで持つために指を骨折する事故が発生すること、また、観客に配慮し、視覚的に分かりやすく、花炮は約3倍の直径14センチメートルの色鮮やかなゴム製へと変更された。更に、ゲーム開始にあたって、火薬によって花炮を飛ばしていたが群衆の中での火薬(爆竹)の使用を禁じた法律に抵触すること、競技者に危険が伴うという理由により電動発射法が採用され、火薬の爆発に代わる効果音と硝煙も演出された。この爆発音と硝煙は搶花炮の民族的特色とされており、大会公式ウェブサイトではこれらの変化を「民族的特色からの現代化発展」と位置付けている。

他方、古代中国の文化遺産を民族スポーツとして再生させ、少数民族運動会に取り込むこともおこなわれている。その一つが今回から比賽に正式採用された蹴球である。蹴球は石球を用いるゲームであり石球自体は古代遺跡からも数多く出土している。北京市民族伝統体育協会によって、清朝の石球を蹴るゲームが再現され、様々な場での10数年のデモンストレーションを経て本大会の比賽として正式採用されるに至った。同様の事例は表演のなかに数多く認めることができる。

2. 政治的動態

少数民族運動会はこれまで原則的に1つの都市で開催されてきたが、今回はラサ、北京の2つの都市で実施された。その理由として、公式には「中国・建国50周年」と「チベット民主改革40周年」の二大慶事をあげている。だが、前者は政治的要請に基づくものとしても、後者には一つの大きな問題が影響していよう。それは、いわゆる「チベット問題」である。中央政府側の一元的価値基準では「チベット解放」とするが、対するチベット側の歴史観では、「1956年のチベット民族の独立運動が人民解放軍により鎮圧され、運動の精神的支柱であるダライ・ラマ14世がインドに亡命してから40周年」という見解も存在する。

現在、中国では3つの分離・独立の動きがみられる。それは台湾、新疆、チベットである（王，2001，p. 104）。中国は憲法の前文で多民族国家であることを明記し、エスニック・グループの国家からの分離・独立の否定が大前提となっており、少数民族、そして民族自治区で起こった「独立」騒動は須く鎮圧してきた^{注13)}。その一方で、行政区画として民族自治地方を設定し、民族自治の権限を主体少数民族に与えるなど、諸民族の自治権を認めている。

少数民族は、人口比のうえでは僅か8パーセント強にしかすぎないが、民族自治地方の面積では全国土の3分の2を占める。また、かつては結果として少数民族の多くは辺境、国境地帯に居住していたが、これらの地域への漢族の大量移入が進行するなかで、少数民族人口のかなり多くが自らの居住地から他の居住地区（漢族を主とする）へと移り住む現象も起こっており、少数民族政策はこれまでのようにひとすじなわでは立ち行かなくなってきた。

ラサでは1987年秋から度々デモがおこなわれ、1989年から1年7ヵ月間、建国後初の戒厳令が布告された。中央政府は、この「40周年」にあたりチベット統治の正統性とその実効性を宣伝する政治キャンペーンに力を注いできており^{注14)}、人民日報には1999年の年頭からその傾向が顕著にうかがえた。

このように、少数民族運動会のチベット開催の理由は、大会を成功裏に導くことで中央政府のチベット統治及び少数民族政策の正当性を国内外にアピールできることと、またチベット問題に対する国際社会の関心の高まりを背景に、チベット情勢が再び不安定化することを警戒し、「祝賀」の警備^{注15)}として対応するためでもあったともみられる。

また、この背景には経済・社会の大きな変動があげられる。大会閉幕の2ヵ月後の11月、中国共産党中央経済工作会議において「西部大開発戦略」の実施が決定され、国家の地域政策の重点をチベット自治区、新疆ウイグル自治区を含む「西部」（全国土の71パーセント）に置くこととした。

これは「改革・開放」政策により、中国東部沿岸の先進工業地帯と中・西部内陸の後進一次産品地帯との間に、経済上の不平等が存在する「東西問題」の克服と少数民族の遠心分離傾向を是正し国家への求心力向上がねらいにあると考えられる。

IV 民族スポーツによるアイデンティティの形成

1. 「少数民族の民族スポーツ」から「中国の民族スポーツ」へ

少数民族が主たる担い手となる全国的スポーツ・イベントの歴史はおおむね2期に分けられる。第1期は、国際スポーツが実施された1953年大会の段階。これは建国もない時期に国威発揚の一環として開催され、具体的には少数民族のなかから優れたアスリートを発掘する目的があったと考えられる。大会ではウエイト・リフティングにて10名の中国新記録が樹立された（中国体育博物館，1990，p. 783）。

文化大革命期をはさみ、第2期には、名称が少数民族運動会と改称された1982年大会以降は民族スポーツが実施されることとなった。1982年大会はその過渡期として、中国における民族スポーツのなかでも特に漢族を中心に広くおこなわれているものを採用し、1986年大会から少数民族がおこなう民族スポーツが中心となり今日に至っている。

少数民族運動会にみる国際スポーツから民族スポーツ重視への転換は、少数民族のスポーツへの国家的要請がトップ・アスリートの人材発掘から、民族スポーツのもつアイデンティティ形成機能への期待に変化したためであると考えられる。これは中国共産党の「伝統への復帰^{注16)}」（横山，2002，p. 124）と軌を一にするものであり、1980年代以降の「改革・開放」により社会主義イデオロギーの求心力が色褪せ、それに変わるものとして「愛国主義」がクローズ・アップされたことと無関係ではない。

先述したように、1981年以降、民族スポーツの全国的競技会開催を視野に入れて、民族スポーツの地方別大会や競技別大会が開催されるなど、

民族スポーツの全国組織化がなされていった。だが、そこには大きな障壁があった。寒川（2004, p. 4）が「民族スポーツはこれをおこなう特定の人間集団に担い手が限られるという意味で『閉じた』といってよい」記すように、類似した形態の民族スポーツであっても地域や集団ごとにルールや用具に差異が存在した。なぜならば、民族スポーツの多くは実修する当該以外の他者との競争を前提とはしていないからである。

そこで、少数民族の民族スポーツは「洗練され、競い合いに発展させ、さらに多くの人々に奨励されなければ」（邱，1995, p. 212）ならないとして、1981年の少数民族スポーツ振興方針によって「特色あるものについては他民族もこれを実施できるようルールを改め、整備して競技化した」（李，1999, p. 51）。儀礼的行為に付随していた民族スポーツから特に「競争」に関わる部分を抽出し「競技」として特化させ、さらにルールや用具の差異を中央政府が主導し統一化することで、当該民族以外での実修を促すとともに競争を可能ならしめた。

このことは、もともと実修していなかった他の少数民族、そして漢族にも「異文化」である民族スポーツをおこなわせることになったことを意味する^{注17)}。

また、中央政府は1985年から1990年にかけて、民族スポーツの保存・継承のため676種目採集し整理をおこない、これに漢族の民族スポーツ30種目を加え、中華民族伝統スポーツ文化体系を構築した（李，1999, p. 51）。これは、「中国文化」の再創造であり、この創られた中華民族伝統スポーツ文化体系に対し多民族国家の共通文化としての新たな真正性を付与させるための一つの場合が少数民族運動会であったといえる^{注18)}。つまり、少数民族運動会で実践される民族スポーツは、宗教的・祝祭的民族儀礼としての意味合いや価値、あるいは当該の民族（集団）から離れ、新たな少数民族運動会という場でこれまでとは違った真正性を獲得することとなった。

これにより、少数民族運動会の比賽に採用された民族スポーツは、彼らの文化的枠組みの中にい

わば「閉じられたコード」として存在していた状態から、他の少数民族、漢族に対しても開かれた中国全体の「通文化的コード」へと変化した。すなわち、当該の少数民族だけが実修する特定の「少数民族の文化」から、次いで55少数民族がおこなう「汎少数民族の文化」へ、そして「中華民族の文化」へと漸次拡大した。これは、主流社会の漢族からみればマイノリティの「異文化」を「自文化」に受容したといえるが、他方、民族スポーツが少数民族運動会の比賽種目として採用されることは、もともと実修してきた少数民族からみれば自文化が中央政府から国家的な認知を受けたことを意味する^{注19)}。いわば、民族スポーツの国家による権威付けである。

グットマン（1997, pp. 2-13）は国際スポーツを例にして、「合理化という側面からスポーツをルールによって拘束し、組織の合理化を可能にさせながら、新しいスポーツを誕生させ、今まで存在してきた」とする。少数民族運動会における「競技化の奨励」（邱，1995, p. 212）は国際スポーツをモデルとし、「少数民族の民族スポーツ」を「中国の民族スポーツ」へ置換させるためにおこなわれてきたといえる。

少数民族運動会は「少数民族のスポーツの発展を促進することを目的」（邱，1995, p. 210）として開催されているが、そこには多民族国家の社会的・文化的統一のためという政治的要請を明確に読み取ることができよう。

2. 民族スポーツから「ポスト民族スポーツ」へ

少数民族運動会では少数民族が民族スポーツを実践することによって、少数民族としての自己像を表象するとともに、アイデンティティの確認、再生産、強化が図られる。だが、「競技化の奨励」によって当該の文化システム、文化コードから離れたという点において、彼らがもともと実修していた民族スポーツとは文化的在りようが大きく異なるといえよう。

寒川（2004, p. 7-8）はスポーツ文化複合の概念について、一定の社会関係を有する人たちがお

こなう民族スポーツは、それに関わる営みが社会的に存在することを当該社会の精神文化が支え保障していると説明する。これによれば、民族スポーツを当該社会の文化文脈のなかで読み解く場合には、そこに立脚している社会文化、精神文化、技術文化の諸要素に分類される「文化」がとりわけ重要視される。ところが、一方では民族スポーツが「国際スポーツ化する際の精神文化の変容」（寒川，2004，p. 12）といった問題も指摘する。

これまで、民族スポーツという分析概念は「これをおこなう民族の文化の枠を出ては生きられないという性質を持っている」（野々宮，1996，p. 227）と本質主義的な理解がなされてきたきらいがある^{注20}。それにより、民族スポーツについて、国際スポーツをモデルとして積極的にそのシステムを利用し「発展」が図られること、また当該の文化領域を越境しておこなわれるようになったこと、あるいはもともとの文化的脈絡から離れ再構築されたことなどの文化変化についても、もっぱら民族スポーツの「近代化」、「近代スポーツ化」、または「国際スポーツ化」、「民族スポーツの国際化」、として取り扱われてきた^{注21}。

だが、このような民族スポーツをめぐる新たな文化事象については、これまでの類概念としての民族スポーツとは分けた方が当該スポーツと関わる多様な文化的諸問題を明らかにするうえで、より有効に機能するであろう。そこで本稿では、民族スポーツの文化変化の過程における連続性に鑑み、「ポスト民族スポーツ」という新たな分析概念を立てることとする^{注22}。

少数民族運動会にみる民族スポーツから「ポスト民族スポーツ」への変化は、「55の少数民族」としての汎少数民族的アイデンティティに主流社会の漢族を加え「56の民族」とすることで中華民族的アイデンティティへ、さらには「人民」としての国家的アイデンティティへの昇華をも容易ならしめた。

これは、「55の少数民族」として漢族の対極に位置付けるのではなく、漢族を含めることで「56の民族」にステータスを上昇させ、そこから提供される中華民族的アイデンティティを国家的アイ

デンティティに置換させることによって、国家としての凝集力を生み出そうとしているといえよう。そこにおいて、少数民族運動会は少数民族に「55の少数民族」としての文化的共有性を持たせ、漢族を核とすることで多民族国家の統合原理として置き換えさせる文化装置として機能している。

このことは、民族スポーツ、あるいは「ポスト民族スポーツ」が多民族国家の国民統合に寄与する過程で、文化的、民族的、国家的、政治的にさまざまな発現するアイデンティティの継承とその変化の媒体となっていることを教える。

吉見（1992，pp. 262-263）は万国博覧会のもつ社会的機能に注目し、「その本質においてきわめて政治的でもあれば、イデオロギー的でもある文化の戦略的な場」とする。少数民族運動会は中国文化を表象するという場であり、民族スポーツの実践、あるいは視覚化によってもたらされる均質な経験の共有がもたらされる。それにより、少数民族に対して自身が中国文化の担い手であることを認識させ、少数民族を「人民」に自己変化する場であるといえる。まさに国家による文化の戦略的な場である。

少数民族運動会において国家にとって重要なのは、少数民族として彼ら自身による民族的アイデンティティの獲得よりむしろ、国家的アイデンティティをもつ均質な「人民」の育成といえよう。

V おわりに

これまで見てきたように、合理的な「科学的国家」中国の少数民族スポーツ政策の一つである少数民族運動会は、外的には国際スポーツから民族スポーツ重視への転換、内的には民族スポーツから「ポスト民族スポーツ」への変化がみられる。また、少数民族運動会における文化の表象性も「少数民族＝異文化」の状況から「少数民族＝自文化」へと変化してきている。そして、少数民族運動会は少数民族としての民族的アイデンティティと中華人民共和国の国家的アイデンティティという二つのアイデンティティを発露する場となっている。よって、担い手の少数民族にとっては少

数民族と「人民」との二つの自己を身に着けることとなり、それぞれエスニシティとナショナリティの発現となる。

こうした、さまざまなレベルのアイデンティティの顕現によって、「民族平等、民族団結」の国是のもとに民族融和政策を進める一方で「民族問題」を抱える現代中国では、少数民族にとってはエスニシティとナショナリティの相克が、中央政府としては彼らにいかんその均衡を保たせ続けるかが多民族国家の将来にとって重要となってくる。まさに、少数民族政策は「両刃の剣」といえるよう。

2003年9月に寧夏回族自治区銀川市で第7回大会が挙行された。本研究では筆者が現地調査を実施した1999年大会についての考察をおこなったが、第7回大会と比較検討することで、本論のテーマがより明らかにされると考える。今後の課題としたい。

注

注1) 1990年の全国人口センサスに基づく「中国民族人口資料」による。

注2) 毛里によれば、現代中国では「国民」に代えて「人民」を採用してきた特有の事情が存在し、周恩来による人民と国民を社会主義の階級的立場から峻別した説明（1949年9月、人民政治協商会議）が、今もなお生きている（毛里、2001, p. 30）。周恩来による説明、特に「人民」の定義の特殊性は本稿の理解にとって重要であるので、少々長いが一部引用する。

「人民」と「国民」の区別について少し説明しなければならない。「人民」は労働者階級、農民階級、ブチブルジョア階級、民族ブルジョア階級、それに反動階級だったが目覚めた一部の愛国民主分子である。官僚ブルジョア階級は……、改造して新しい人にしていくべきだが、改造前は人民の範疇には入らない。それでも中国の一国民であり、当面彼らには人民の権利は与えられないが、国民の義務は守らなければならない。……つまり、国民には「人民の敵」も含まれ、いわば中国の国籍をもつもの、公民に

ひとしい（毛里、2001, p. 30）。

よって、本稿は国家政策を取り扱うことから、政治的アイデンティティに拠る限定的な概念である「人民」を用いる。また、本稿で扱われる理論モデルや概念は少数民族運動会に限定されるものであることはことわっておく。

注3) 中華民国時代に唱えられていた「五族協和」は、中国史上初めて複数の民族の協和という考えを打ち出したものであったが、実際には漢族をその中心に置き、他の4族が漢族に同化することによって達成される「調和」のことであり、「大漢族主義」に他ならなかった。

注4) 民族の認知にあたっては「歴史的に構成された、人々の強固な共同体」というスターリンの民族定義を掲げながらも、実践的には彼ら自身の「民族意識」を特に重視し、それには民族学的調査が重要な役割を果たした。

注5) 1954年までに29族が、1965年までに16族が新たに少数民族として認定され、1979年のジノ族が加えられ55族となった。

注6) 1979年に採用された「一人っ子政策」が少数民族に比較的寛容であったこと、また、少数民族に与えられている進学や就職の際の特別待遇を得ようとしたことであったとされる。

注7) インドネシアにおける村レベルの影絵芝居の事例をもとに指摘する。

注8) 「比賽」は民族スポーツを共通ルールにて競う「競技」のこと。「表演」は各々の少数民族固有の、あるいは特色をもった民族スポーツによる採点競技のこと。

注9) 1982年大会は自動的に第2回とされた。

注10) 馬術のみ、同年8月にフフホト市で実施された。

注11) 中華人民共和国は台湾に居住する少数民族を「高山族」として一括しているが、中華民国（台湾）は「原住民」として12族に区分している。少数民族運動会に参加したのは、その民族衣装などから推測して原住民諸族のなかでも最も人口が多いアミ族と思われる。

注12) 他にも民族文化祭、民族芸術週間、民族交歓会、民族写真展など少数民族をテーマとしたさまざまな関連行事が催された。

注13) 1980年代後半には民族地区でエスノ・ナショナルな要求が噴出し、政府が「民族分離主義」

とみなして政治問題化した。1989年の天安門事件、1991年のソ連邦崩壊に影響を受けて、民主化運動や少数民族の独自性を求める動きに対して当局は過敏なまでの対応を見せてきている。

注14) 大会期間中、チベット文化の象徴であるポタラ宮には「偉大なる中華人民共和国万歳」の垂れ幕が掲げられた。

注15) 大会期間中、ラサ市内は人口と比較して多くの人民解放軍、公安関係者の姿が目立ち、競馬場では約1メートル間隔で人民解放軍兵士が立ち並ぶなど、人海戦術による厳戒態勢がしかれていた。

注16) 横山は中国共産党の変化について、「全面欧化」論から「半面欧化」論へ、そして「中国化」論へと変遷しており、その流れを「伝統への復帰」とする。

注17) 第6回大会には北京体育大学、北京師範大学の体育系学生が数多く動員された。

注18) 橋本（1999）によれば「文化の真正性」は常に動態的に再構築されているものであり、誰にととの「真正性」であるのか、誰によって主張されるのか、あるいは求められるのが重要な問題であるとする。

注19) この一例として、朝鮮族を中心におこなわれているシルムを少数民族運動会の比賽にしようとする動きがみられる。

注20) 寒川が「民族スポーツはこれをおこなう文化を離れては成立しないという閉じられたコード体系として存在する。リングフランカ（共通語）としての国際スポーツに比べ脆弱にみえるが、だからこそ民族アイデンティティの形成には抜群の威力を発揮する」（寒川、1997、p. 6）と国際スポーツとの対比のなかで特にその有効性を論じた文脈から、前段の部分のみが切り取られ、それにとらわれ過ぎてきた観が否めない。研究対象も民族的、伝統的、伝統的、伝承的、前近代的、地域限定的な形のものがもっぱら取り扱われてきた。

注21) この問題に関する研究としては、バスクの民族スポーツについて論じた、竹谷和之（1990）エスニック・スポーツと近代化。体育の科学、40（7）：528-532。があげられよう。

注22) ここでいう「ポスト」とは、ポスト・モダンの概念が指し示すところとは同一ではない。時

間軸としての「後」を表す意味で「ポスト」を用いる。そもそも、マックス・ウェーバーによる「近代」と「伝統」の二項対立的な概念が有効であるかといった問題も存在する。そのこともあり、本稿では「伝統スポーツ」ではなく「民族スポーツ」という言葉を用いている。

文 献

- 朝日新聞電子版（1999）朝日新聞社：東京。
 中国体育博物館・国家体委文史工作委員会編（1990）中華民族傳統體育志。広西民族出版社：中国。
 中華人民共和國第六屆少数民族傳統體育運動會組織委員會（1999a）中華人民共和國第六屆少数民族傳統體育運動會ウェブサイト（<http://minzuydh.bta.net.cn/>）：中国。
 中華人民共和國第六屆少数民族傳統體育運動會組織委員會（1999b）中華人民共和國第六屆少数民族傳統體育運動會總秩序冊：中国。
 第6回全国少数民族傳統體育運動會拉薩分賽場專刊編集部（1999）第6回全国少数民族傳統體育運動會拉薩分賽場專刊：中国。
 第六屆全国少数民族傳統體育運動會拉薩分賽場壽委會宣伝部刊行物編輯部（1999）第六屆全国少数民族傳統體育運動會拉薩分賽場專刊：中国。
 邱玉才（1995）中国少数民族の傳統スポーツ。伝統スポーツ国際会議実行委員会編 21世紀の伝統スポーツ。大修館書店：東京、pp. 206-216。
 グットマン：谷川稔訳（1997）スポーツと帝国：近代スポーツと文化帝国主義。昭和堂：京都。
 橋本和也（1999）観光人類学の戦略。世界思想社：京都。
 李建国（1999）中国における少数民族スポーツ政策。体育科教育、47（10）：50-52。
 マカールン：光延明洋訳（1988）世界を映す鏡：シャリヴァリ・カーニヴァル・オリンピック。平凡社：東京。
 宮永國子（2000）グローバル化とアイデンティティ。世界思想社：京都。
 毛里和子（1998）周縁からの中国：民族問題と国家。東京大学出版会：東京。
 毛里和子（2001）現代中国の構造変動 7 中華世界：アイデンティティの再編。東京大学出版会：東京。
 野々宮徹（1994）スポーツの現在。稲垣正浩ほか 図説スポーツの歴史。大修館書店：東京。

- 岡本雅亨（1999）中国の少数民族教育と言語政策．評論社：東京．
- 人民日報電子版（1999）人民日報社：中国．
- スミス：高柳先男訳（1998）ナショナリズムの生命力．晶文社：東京．
- 寒川恒夫（1991）スポーツ文化複合．体育の科学，41（2）：139-145．
- 寒川恒夫（1997）スポーツ学への招待．アエラムック スポーツ学のみかた．朝日新聞社：東京．
- 寒川恒夫（2004）スポーツ人類学のパースペクティブ．寒川恒夫編 教養としてのスポーツ人類学．大修館書店：東京．
- 塚田誠之（2001）チワン族の「三月三歌節」にみられる文化変容とその背景．佐々木信彰編 現代中国の民族と経済．世界思想社：京都．
- 王 柯（2001）民族問題．創土社編 中国年鑑 2001．創土社：東京．
- 新華社（1999）中華人民共和国第六屆少数民族伝統体育運動会ウェブサイト（<http://202.84.17.82/myh/home.html>）：中国．
- 横山宏章（2002）中華思想と現代中国．集英社：東京．
- 吉見俊哉（1992）博覧会の政治学．中央公論社：東京．
- （平成16年10月15日受付）
（平成17年11月19日受理）